

用語簡単な日本語に

「避難勧告」「余震」「身を守る」など、災害時の専門用語は、日本語が母語でない人にとって耳慣れない言葉が多い。京都府内の日本語教室講師らでつくる「やさしい日本語有志の会」(京都市)では、外国人や外国出身者が多い地域向けに、防災用語を分かりやすい表現に変換する講座を開いている。

観光都市の京都では、定住外国人約5万人に加え、訪日客も年間300万人を超える。外国人も犠牲となった東日本大震災後、外国人が働く工場



災害時多言語支援センターの設置訓練。国際交流協会の日本人スタッフたちが、6カ国以上の言葉で情報を発信した。2月25日、京都市京丹波町・町立中央公民館

京都・京丹波

2月25日、京都市京丹波町で「災害時多言語支援センター」設置訓練が開かれた。震度6の地震が発生した際の想定で、国際交流協会のスタッフが行政発表の被害状況や支援情報をやさしい日本語に置き換えた。津波をへとも高い波に、「安全を確認する」を「大丈夫か聞か」と「避難所へ逃げる」と「避難所に逃げるところ」と言い換える。

言葉の壁課題

京都市新聞社 野妻 東日本大震災で被災したフイリン出身女性に取材した際、言葉の壁で同胞が津波の犠牲となった無念さを語っていた。外国出身でも言語や背景はさまざま。災害時は英語を使っても簡単な日本語の方が伝わるケースも多いという。

訓練に参加したインドネシア出身の会社員和田リリンさん(51)は「災害の時に知らない言葉ばかりだとパニックで動けない。簡単な日本語の方が多い」と話した。

「やさしい日本語有志の会」では、防災冊子の監修や行政関係者向け講習にも力を注ぐ。

災害時の行動「約束」

阪神・淡路大震災で多数の家屋が倒壊、焼失した神戸市長田区の真陽地区は、その教訓から自主防災組織「真陽地区防災福祉コミュニティ」(防福)を中心に防災に取り組む。東日本大震災後、津波災害時にいち早く避難することを重視。その一つが災害時の行動を宣言する「クレド」。

南海トラフ巨大地震では地域の8割が津波で浸水するとされる。人口は約6700人で新旧住民が混在。高齢化率は3割を超える。東日本大震災後、防福は



災害時の行動や備えを宣言する「クレド」。小学生が思いの決意を示した。神戸市長田区の真陽小

神戸・長田区

部長の中谷勉(67)は消防署の依頼でメンバーと地域を回り、津波の可能性を伝える。また、津波の映像に「諦めるしかない」との空気が広がった。

そこで関西大の近藤誠司准教授(災害情報学)と連携し始めたのが「クレド」。住民一人一人が災害時の行動や事前の備えを宣言する。「逃げ遅れる」「早く高台へ」「子どもを助ける」など。学生が地域や地元小学校を回って宣言を集めた。写真に収めてカレンダーを作り、各戸に配布して思いを共有する。「前向きな宣言をすることで積極性や責任感を生み出す」と近藤准教授は話す。

再確認の機会

神戸新聞社 井沢泰斗 「これも逃げられない」。東日本大震災の津波の映像に高年齢者は意気消沈した。だが、気持ちは分かるが、後ろ向きな意識は災害への備えを口にするだけで、自身の防災行動を見つめ直すきっかけにしたい。

メモ 阪神・淡路大震災を教訓に地域の結びつきを防災力を高めようと、神戸市は各小学校単位で「防災福祉コミュニティ」の整備を進めた。自治会や消防団を中心に現在市内全域の101地区で定着。防災訓練や住民間の関係強化に取り組む。

情報発信 連携継続を

東日本大震災を機に全国各地「各地域ならではの防災の取り組みを確かめる機会」となった。各地の事例は「やっとならなくていいな」「内容が多く、他地域でも応用可能。実践の広がり期待できる」。

被害想定に沿った対応は重要だが、想定を超える場合もあることを示したのが3・11の教訓。災害への感性を高める取り組みをしている宮崎の「むすび塾」を共催した縁で、地方メディア同士が備えるよう住民の防災意識を高める努力をしていく。



今村 文彦 所長

東北大災害科学国際研究所

伝える 防災の最前線

いのちと地域を守る 311メディアネット

「逃げトレ」何度でも

関西では南海トラフ巨大地震に備え、スマートフォンアプリを使った避難訓練が行われている。津波想定データを組み込んだ個別避難訓練アプリ「逃げトレ」で、京都大防災研究所が2019年春の完成を目指して開発を進めている。

大阪府堺市で2月25日に行われた訓練では、地元の子供や国際大の学生15人が「逃げトレ」を使って避難した。

南海トラフ地震で堺市に揺れが到達すると想定されている。津波が迫る状況を体験するため、学生たちは避難開始を地震の1時間40分後などの遅い時間に設定。近所の高齢スマートフォンを画面を見ながら避難訓練に取り組む大学生たち。2月25日、堺市



大阪府堺市で2月25日に行われた訓練では、地元の子供や国際大の学生15人が「逃げトレ」を使って避難した。

住宅の耐震化着々と

高知県黒潮町の出口地区は海に近い集落で130世帯ほどが集まっている。比較的古い家が多いこの集落で2年ほど前から、ちよっとした耐震ラッシュが起きている。「家の下敷きになったら逃げられない」と高知県が力をいれるのが住宅の耐震化率を上げるためだ。

全国最大の34府の津波想定が出されている黒潮町は、改修工事の知識を持つ業者を増やすことに着手した。2015年度から業者向けの勉強会を開催。登録業者数は現在38社で、14年度の4倍近くに増えた。効果は目に見えて表れ、町



高知県黒潮町の出口地区は海に近い集落で130世帯ほどが集まっている。比較的古い家が多いこの集落で2年ほど前から、ちよっとした耐震ラッシュが起きている。

児童生徒感性高める

枕元に必ず置く防災頭巾、懐中電灯、靴の3点セットは「守っている時の地震に備え」を育てるための防災グッズです。宮崎市・木花中1年の清水蒼太さん(10)は日頃から備えを忘れない。新聞やテレビなどで災害報道を目にするたびに「自分なりに行動するつもり」と考える。

小学4年生の時、同市・木花地域まちづくり推進委員会が開く「少年防災マスター養成講座」に初めて参加した。



宮崎市木花地域などを震った外所地震は1662年に発生。日向灘を震源とし、マグニチュード7.6と推定される。日向灘を中心に津波も襲い、沿岸部の村や田畑などが海に沈んだとされる。同地域の島山地区には古くから50年ごとに供養碑が建てられ、現在7基存在する。

津波から逃げ遅れ、画面上に「避難失敗」と表示され

津波から逃げ遅れ、画面上に「避難失敗」と表示され、再度訓練を行ったチームもあつた。津波は海だけでなく、川からも押し寄せる。ベトナム人留学生のダン・ヒュエン

者施設に立ち寄り車いすの利用者と一緒に行けるなど、厳しい条件で訓練に臨んだ。

「逃げトレ」のダウンロードはアンドロイド版 <http://www.drds.dpri.kyoto-u.ac.jp/sip/android.html>、iPhone版 <http://www.drds.dpri.kyoto-u.ac.jp/sip/ios.html>。連絡先は京都大防災研究所・矢守研究室=メール sip-yamori@drds.dpri.kyoto-u.ac.jp



津波から逃げ遅れ、画面上に「避難失敗」と表示され、再度訓練を行ったチームもあつた。津波は海だけでなく、川からも押し寄せる。ベトナム人留学生のダン・ヒュエン

高知・黒潮

担当者は「業者が顔なじみなので、住民も工事を申し込むみて耐震が進んでいる」。

2月26日、高知県黒潮町出口合板を壁に張る耐震工事。地域ぐるみの取り組みが、町職員ら



担当者は「業者が顔なじみなので、住民も工事を申し込むみて耐震が進んでいる」。

宮崎

避難などさまざまな。昨年8月には熊本大地震の被災地訪問も組み込み、子どもは「実際に被災地を訪れることは、高知所がどこかを考

宮崎市の木花地域などを震った外所地震は1662年に発生。日向灘を震源とし、マグニチュード7.6と推定される。日向灘を中心に津波も襲い、沿岸部の村や田畑などが海に沈んだとされる。同地域の島山地区には古くから50年ごとに供養碑が建てられ、現在7基存在する。



宮崎市の木花地域などを震った外所地震は1662年に発生。日向灘を震源とし、マグニチュード7.6と推定される。日向灘を中心に津波も襲い、沿岸部の村や田畑などが海に沈んだとされる。同地域の島山地区には古くから50年ごとに供養碑が建てられ、現在7基存在する。

町強い思い

高知新聞社・海路佳幸 国から津波高34分の想定が示された後、黒潮町は住民に広がった「諦め感」と戦ってきた。今では住民同士が住宅耐震を勧め合う雰囲気もある。町の「犠牲者を限りなくゼロにしたい」という強い思い。備えは着実に進んでいる。

地域で手携え

宮崎日日新聞社・赤塚 自然災害による被害を最小限に抑えるには大げなだけでなく、子どもの防災意識向上も欠かせない。ただ、ソフト対策は一朝一夕にはいかない。少年防災マスター養成講座のように、住民や学校など地域全体でスクラムを組んで備えを進めることが大切だ。

同講座は17年度までに8回を終え、延べ100人が受講した。同委員会安全推進部長の山崎泰道さん(71)は「災害や防災への感性を高めてもらうのが狙い。将来の防災リーダーとなるきっかけづくりの場として継続していく」と力を込める。